

十字架上の七つのことば
第7回「父よ、私の霊を御手に委ねます」

イエスは大声で叫ばれた。「父よ、私の霊を御手に委ねます。」こう言って息を引き取られた。

(ルカ 23:46)

1. 背景

主イエスの十字架上で最後のことばは、詩編 31:6 からの引用でした。ユダヤ人の多くは、この詩を寝る前の祈りとして唱えていたと言われています。つまり、主イエスは幼い頃から慣れ親しんできた「委ねの祈り」を最期の瞬間に口にされたのです。また、「エリ」「エロイ」と叫ばれたときは神の沈黙と断絶を味わわれましたが（そこでは敢えて「わが神」と呼びかけられていた）、最後は再び「父よ」と呼びかけています。ここに「見捨てられたような孤独を味わってなお、父への信頼に回帰された姿」が描かれていると言えるでしょう。

2. 意味

このことばには二つの深い意味があります。

① 全き信頼の委ね

主イエスは、自らの霊を父の御手に託し、最後まで神への信頼を持って息を引き取られました。これは「死の恐怖さえも神に委ねることができる」という究極の信仰の姿です。

② 完成された救いの安らぎ

このことばは苦悩の叫びではなく、安らぎに満ちた「委ねの祈り」です。贖いの業がすべて成し遂げられたからこそ、安心して御手に身を委ねることができました。

3. 適用

私たちも人生の中で、自分の力ではどうにもならない局面を迎えることがあります。そのときに「父よ、御手に委ねます」と祈れることは大きな力です。また、死に至るその瞬間も、主イエスが示してくださったように、恐れではなく「神の臨在の許に帰る平安」として受け止めることができます。さらに日常の小さなことでも「御手に委ねる」訓練をすることで、人生の終わりにも信頼をもって委ねることができるのです。

4. 祈り

「父よ、私の霊を御手に委ねます」と祈られた主イエスよ、あなたの完全な信頼の姿を見ることができ感謝します。私たちもまた、人生の不安や死の恐れを抱えるとき、同じように父の御手に委ねる信仰を与えてください。今日の歩みの一つひとつを御手に委ね、安心してあなたに従うことができますように。」